

【普及事項】

新技術名： リンゴモニリア病の株腐れ防止法 - (平成9～10年)

研究機関名 果樹試験場環境部病害担当
担当者 水野 昇・佐藤 裕

【要約】 落花直後にアンビルフロアブル、スコア水和剤又はトップジンM水和剤を散布することにより、花器感染したリンゴモニリア病の、実腐れから株腐れ（果そう腐敗）への病斑進展を防止することが出来る。

【ねらい】

リンゴモニリア病の葉腐れが多発すると、治療防除を実施しても時として花器柱頭感染による実腐れ（幼果腐敗）を十分防ぐことが出来ない場合がある。実腐れは、品種又は落花期の多湿条件により果そう基部まで病徴が進展する“株腐れ”になり、果そうの欠落と着果量の不足を招くことがあるため、この防止法を検討する。

【技術の内容・特徴】

1. モニリア病葉腐れ治療効果が認められている殺菌剤を供試し、柱頭へ分生胞子を接種6日後に散布した結果、株腐れ防止効果が高かった薬剤はアンビルフロアブル1000倍、スコア水和剤3000倍及びトップジンM1000倍であった（表1）。
2. 柱頭へ分生胞子を接種し、3日、6日、9日及び13日後にアンビルフロアブル1000倍を散布した結果、株腐れ防止効果は接種後9日まで高かったが、13日後では劣った（図1）。
3. 株腐れ防止効果が高い慣行散布時期は落花直後であり、その後連続散布しても防止効果は向上しなかった（表2）。
4. 以上の結果を総合すると、柱頭感染から6日～9日までに、慣行散布時期では落花直後までに1回上記薬剤を散布することにより、株腐れの発生を防止できる。

【普及対象範囲】

全県のりんご栽培地域

【普及・参考上の留意事項】

1. 株腐れ防止効果は散布時期が早いほど高いため、満開後はできるだけ早期に散布する。
2. 実腐れの発生が多いときは、分生胞子形成抑制効果がある治療剤を開花前に散布して実腐れの発生を出来るだけ抑える。
3. 黒星病とモニリア病の株腐れを同時に防除する場合は、アンビルフロアブル又はスコア水和剤を選択し落花直後に散布する。

[具体的なデータ等]

表1 各種殺菌剤の株腐れ防止効果(1998)

供試剤	希釈 倍数	調査 果そう数	株腐れ 果そう率(%)	健全果残存 果そう率(%)
ヘキサコナゾール70アール	1000	57	0	94.7
チオファネートメチル水和剤	1000	60	1.7	81.7
ジフェノコナゾール水和剤	3000	56	5.4	85.7
クレソキシムメチルトライ70アール	3000	60	16.7	73.3
オキシポコナゾール水和剤	3000	59	10.2	83.1
無 散 布	—	60	43.3	53.3

品 種：ふじ 接種月日：4月28日 散布月日：5月4日 調査月日：5月26日

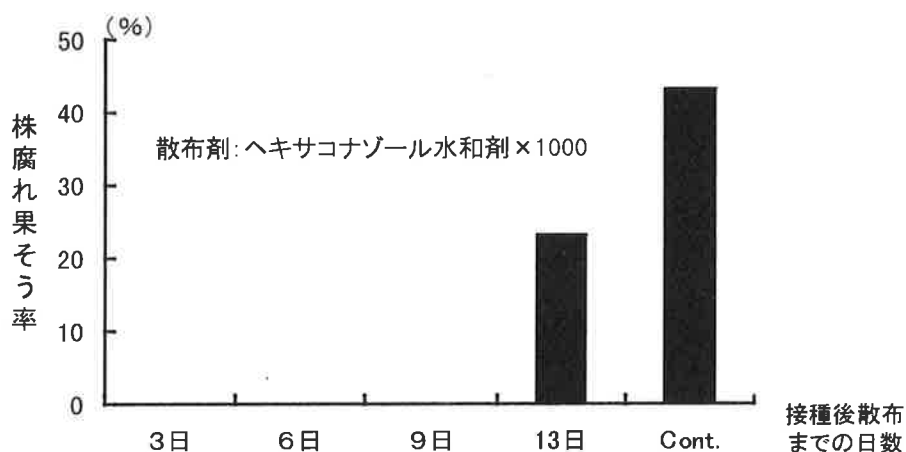


図1 株腐れ防止効果を発現する感染後日数(1998)

表2 散布時期と株腐れ防止効果(1997)

供試剤	散布時期		株腐れ 果そう率(%)	健全果残存 果そう率(%)
	落花直後	落花10日後		
ヘキサコナゾール70アール×1000	○	—	0	83.3
//	—	○	58.6	41.4
//	○	○	10.0	73.3
ジフェノコナゾール水和剤×3000	○	—	10.0	80.0
//	—	○	66.7	26.7
//	○	○	3.5	82.1
無散布(接種)	—	—	43.8	53.1
無散布(無接種)	—	—	0	100.0

注 1.調査果そう数：1区28～32 2.接種月日：5月10日 調査月日：6月9日
3.落花直後：5月16日 落花10日後：5月26日 4.品 種：ふじ

[発表文献等]

1. 北日本病害虫研究会報第50号(投稿中)